

氏 名 中村 真里絵

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大乙第 283 号

学位授与の日付 2024 年 3 月 22 日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 タイ東北部における土器づくりと職人をめぐる人類学的研究
——土器生産地ダーン・クウィアンの形成

論文審査委員 主 査 池谷 和信
人類文化研究コース 教授
信田 敏宏
人類文化研究コース 教授
韓 敏
人類文化研究コース 教授
津村 文彦
名城大学 外国語学部 教授
森田 敦郎
大阪大学 大学院人間科学研究科 教授

博士論文の要旨

氏 名：中村 真里絵

論文題目：タイ東北部における土器づくりと職人をめぐる人類学的研究——土器生産地ダーン・クウィアンの形成

本論文は、タイ王国東北部の農村地域において、随一の土器生産地であるダーン・クウィアンとそれに関わる人々の民族誌である。周辺地域の土器づくりが衰退するなか、生産地が形成したプロセスと人々が現在農村でどのように土器づくりをしているのかを描き、タイ農村におけるものづくりのあり方を明らかにすることが本論文の課題である。

「第1章 序章」では先行研究を検討し、本論文を文化人類学のものづくり研究、タイの農村社会学の研究、そして1980年代以降のタイ農村の非農業を扱う民族誌の間に位置付けた。農村研究において長らく生業であった農業の影であったものづくりに焦点を当て、タイ農村を再考する。

「第2章 調査地の概要」では、東北部が国家形成期以降、経済的政治的に周縁に位置付けられてきたことを述べた。1960年代以降はバンコク都市部への出稼ぎのため、多くの若者が流出し、農村部の弱体化が指摘されてきた一方で、調査村落は人々が活発に行き来し、生活空間であると同時に経済活動の空間であることがわかった。

「第1部 副業から専業へ」では、まず「3章 副業時代の土器づくり」において、かつて土器づくりは低地の農耕地でアリの塚、森林、土地、川という自然資源に密接に結びついてきたことを述べた。男性たちの長距離移動の慣習によって、行く先々で稲作の収穫量の不足分を補うために土器を物々交換していた。これにより、土器は地域一帯に流通していた。1960年代に入り土地開拓がすすみ農耕地での土器づくりができなくなると、美術教師によるレンガ窯の技術が導入され、集落内部へと土器づくりの場所が移動し、洪水に影響を受けずに通年の土器づくりが可能になった。

第4章「日用品から装飾品へ」では、1970年代から80年代にかけて、装飾品へとつくる土器を転換させることにより、土器づくり産地として発展したことを述べた。これは、1970年代の民主化運動にかかわった学生運動家たちが、政府の弾圧を逃れて「森へ入る」時にダーン・クウィアンにやってきた際、土器に模様付けをもたらしたことによる。その後、誕生したビーズのネックレスは、ロックバンドや映画スターが着用したことにより若者の間で流行し、ダーン・クウィアンは「土器生産地」としての地位を確立した。

第1部では、農耕地で行われていた土器づくりが村落内部に移動し、農業に替わる新たな生業となったことを明らかにした。それは、地方の一農村が貨幣経済化や中央の政治に接合し、巻き込まれていく過程でもあった。第2部では、土器づくりが農耕地から村落内へと移動した時、どのように再配置されているのか、また社会関係がどのように再編されているのかを論じた。具体的には、人びとが屋敷地という親族固有の領域で、どのような社会関係のもとで土器をつくっているのかを、製作工程、社会関係、屋敷地という三つの要素から捉えて分析した。

まず、第5章「現在のダーン・クウィアンの土器生産」では、製作工程に着目し、集落に取り込まれた土器づくりの生産体制が再編される際、原料の獲得から作業の各工程、そして販売、流通にいたるまでが細分化され、分業化されてきたこと、作業の一部が機械化もされていることを明らかにした。土器をつくるという一連の作業を通じて、人々は夫婦や工房内のみではなく、工房外の人とも新たなつながりを持つことになった。作られる土器は多様化したものの、都市の店舗と受注関係で結ばれた工房は同じものを大量につくることになった。

第6章「屋敷地における土器づくり」では、村落の外で営まれた土器づくりが村落で再配置され、屋敷地にて夫婦、親族、隣人関係という近しい関係に基づいて営まれてきたことを明らかにした。屋敷地では、子供たちは結婚すると家屋と工房を独立したのち、窯も独立するという、居住と生業が結びついた生活を送っていた。土器づくりは、農業を生業としていた時代の屋敷地共住集団の延長線上に営まれていた。しかし、世代が下ることにより屋敷地は分割され、家屋、工房、窯で飽和状態になると工房や窯を独立していくことは難しく、人びとの紐帯も弱まる段階へと入っていく。時間の経過とともに、工房では外部からの職人を雇うようになっていく。

第7章「成形技法からみる社会の変化」では、外部の職人が流入することにより成形技法が複数化していることを明らかにした。彼らは土地がないため工房主になることはない。雇われの出稼ぎ職人として村に居住し、収入の条件がよければ別の生産地へ移動する、雇用関係のみで結びついた存在であった。彼らの技法は小さい土器をつくるのに適していたため、大きい土器をつくるのが得意な在来の技法と棲み分けられ、村における彼らの存在感は高まっている。

本論文全体を通して、ダーン・クウィアンという土器生産地を舞台に、土器づくりとそれを担う人々の多様な関係とその変遷を描きだしてきた。

土器生産地は、周辺村落の若者による出稼ぎ労働の増加や、換金作物栽培への転換のなか形成しており、村の人々にとって土器づくりに従事することは、工場労働や換金作物栽培に代わる生活の糧を得る手段であり、別の生業とも代替可能なものであった。また村落内部に目を転じてみると、土器づくりは農業を支える居住形態であった屋敷地共住集団の延長線上に営まれていた。しかし、それは相続可能な土地の余剰に依存しているため、世代が下ると物理的限界を迎え、集団内の人々の紐帯も弱まり崩壊する。かつてのように新たな土地を開拓する移動はないため、足りない土地は補充されることはない。土器づくりと土地と親族との密接なつながりがなくなった現在、外部の職人を受け入れるケースも多くなっている。外部の職人は、新たな技法とともに村に流入し、土器づくりはますます活発化している。タイの土器づくりは、日本の窯元のように親から子へと代々継承しなければいけないものではなかった。常に、外部からの学生や知識人、そして現在では出稼ぎ職人を受け入れ、柔軟なものづくりをおこなってきたのである。

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 中村 真里絵

Title
論文題目 タイ東北部における土器づくりと職人をめぐる人類学的研究
——土器生産地ダーン・クウィアンの形成

本論文は、タイ東北部（イサーン）コラート県の農村地域において、農業から土器づくりに生業を転じた村落での土器づくり職人の民族誌である。著者は、調査村が農村から土器生産地へと変貌するプロセスを、関係者への聞き取りを中心にして再構成した上で、土器づくりの専門化にともなう技術と社会の持続と変容を、タイの農村社会と比較しながら分析・考察している。具体的には、2005年10月から2006年8月まで調査村において住み込み調査を行ない、その後、数回にわたり補足調査を実施した。

本論文は、序論と結論を含めて全体で8章から構成されている。第1章の序論では、研究目的を述べた後、先行研究のレビューを行ない、ものづくり研究やタイの農村社会研究における本論文の位置づけや研究の視座を示している。第2章では、調査地が位置するタイ東北部の特徴を概観した後、歴史や文化的背景、貨幣経済の浸透の観点から調査地のダーン・クウィアン地域C村の概要を述べている。

第3章では、聞き取り調査で得た人々の語りと文献資料に基づいて、1970年代まで農業の副業であった土器づくりの様子を復元している。当時は、稲作が行われる水田の川沿いに粘土や砂が取れたため、焼成窯の代わりとしてシロアリの塚を利用しながら、農閑期に水田の片隅で土器づくりを行ない、出来上がった土器を牛車で近隣の地域に運び、主に米などと物々交換していたという。その後この地域では森林開発が進み、アリ塚が破壊されたり、土地の所有意識が芽生え、他人の土地で土器づくりをするのが難しくなったが、村外の知識人がレンガ窯をもたらしたことを契機として、場所や時間に制限を受けない土器づくりが調査地では可能になったことを示す。

第4章では、1970年代から1980年代までに土器づくりが一時的な衰退を経て専門化していく過程を描いている。この頃になると、日用品としての土器は、アルミ製やプラスチック製、さらにはセメント製のものに代替されるようになり、土器の需要は減っていき、土器づくりが廃れていく。その一方で、この地域に移住してきた村外の知識人たちは、土器に彫刻して模様付けをしたり土器の販路を開拓して様々な注文を受けるようになり、その仕事を村の職人にも下請けとして回すようになっていく。

第5章では、著者が参与観察した、土器づくりが専門化した村において土器の製作工程をはじめ、デザインや流通形態など、土器づくりの全体像を明らかにしている。原料の採取から、素地づくり、成形、乾燥、模様付け、焼成の工程を細部にわたって記述している。その他にも、デザインの多様化や流通の変化についても具体的な事例と共に記述している。

第6章では、土器づくりの専門化に伴い村内の屋敷地に作られるようになった工房や屋敷地における家族・親族関係や継承状況について、3つの親族グループの事例を記述して

いる。タイの農村社会では双系的な親族組織および均分相続に基づいた屋敷地共住集団が特徴として挙げられているが、そうした組織原理は農業から土器づくりに転じた調査村でも同様であり、工房や職人としての技術の継承に反映されている。本章では、世代を経るごとに屋敷地が分割されることで、逆に工房の継承が複雑化し、場合によっては継承しないという事態が起きていること、さらには、屋敷地を持たない村外者による工房の新設が難しいことなどの問題を指摘している。

第7章では、調査村において複数の土器の成形技法が併存していることに着目し、それぞれの技法の特徴と、技法の違いがもたらす意味について論じている。なかでも技法には在来と外来のものがみられ、ろくろの回転方向が違うなどのために、在来技法は大型の土器を成形するのに適しているのに対し、外来技法は短時間で大量の土器を成形するのに適しているという特徴を示す。

第8章の結論では、本論文の議論をまとめ、従来のタイの農村社会論と比較しながら、調査村の土器づくりの特徴、すなわち、親から子への継承にこだわらない継承方法や、伝統的な技法にこだわらず新たな技法やデザインを柔軟に取り入れる気風を浮き彫りにし、調査村において開かれたものづくりが行なわれている原理を明らかにしている。

以上のように本論文は、タイ東北部の土器づくりの村において農業から土器づくりに転じた歴史的経緯や、現在の土器づくり活動および土器の販売状況を明らかにしたものであり、以下のような優れた点を挙げるができる。第一は、これまでのタイ東北部を対象にした人類学的研究ではラオ人の暮らす水田稲作村に集中してきたが、本論文ではコラート人の生活誌に焦点を当てており資料的な価値が高い。第二は、土器づくりの専門化の過程とその技術や社会の変化を歴史的資料と現地調査の成果を融合して丹念に把握した点である。とりわけC村を中心とした土器の産地形成を土地開発、貨幣経済の浸透、民主化運動家の影響などタイの社会変動が埋め込まれた生産地として読み解いた点である。

その一方で、本論文では、タイ語の表記の問題や工房や工場の用語が不明瞭であることに加えて、調査村での悉皆調査が不十分であるために職人の年齢や生産形態など十分に言及されていない点を指摘できる。

しかしながら、本論文はこれまで詳細な調査があまりなかったコラート人の土器づくりに注目して、土器づくりの専門化の過程と土器づくりの現況を把握したものであり、世界各地のものづくりを比較しようとする研究者にとって、本論文の民族誌的な記録は、学術的な価値が極めて高いと言える。よって本論文は、博士の学位を授与するに値すると審査委員全員一致で判断した。